[dõ:k]

DONC どんく

発 行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059－226－2766
FAX 059－229－0967

N° 75 février 2006 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

3月26日（日） 柏木隆雄先生のフランス文化講演会

＜フランス人の見た幕末日本＞

今春も恒例となった柏木隆雄先生（大阪大学教授・文学部長、松阪市出身）の講演会を開催します。テーマは、昨年のご講演「日本人はどのようにフランスを知ったか～洋学の系譜」のいわば裏返しとして、かつての時代にフランス人がいかに日本人や日本文化に触れていったかを、当時の雑誌や紀行文などをたどりながらお話しいただきます。いま私たちがかかわっている日仏交流のルーツを考えるうえでも貴重な材料を提供していただけるでしょう。

一般公開といたしますので、会員以外の方もお誘いして多数ご来聴ください。

日 時 3月26日（日曜日）午後2時～4時
場 所 アスト津 3階ミーティングルーム3・4
入場無料

＊講演会終了後、先生を囲んで懇親会を予定しております。

なお、柏木先生は雑誌「ふらんす」（白水社）4月号から4回にわたってモーパッサンの短編小説についての解説を連載されるとのこと。「首飾り」の原文、和訳と解説です。フランス語の勉強も兼ねてぜひお読みください。

＝三重日仏協会主催＝

2006年度春季 フランス語入門講座（全8回）

4月10日（月）より毎週月曜日 午後6時～7時

◆津駅前・第1ビル6階会議室

講 師 J-F.ダメム先生（三重大学人文学部講師）

◆参加費用 会 員 8,000円
一 般 10,000円

◆募集定員 先着 20名

参加希望、お問い合わせは
滝 澤 059－225－2517（夜間）
長 嶋 090－1720－9960（夜間）
ダメム 0598－26－7170

果てることのない私の“追っかけ旅”

名作映画やマルセイユ生誕2600年祭などと偶然の出会いも…

太田　理恵子

大学の外国語学部フランス学科でフランス語を習い始めて１年経とうとした1995年３月、私はいてもたってもいられず、家族の心配などそっちのけで生まれて初めてのヨーロッパへ、それも大韓航空往復チケットとホテルしかついていないたった３泊５日の一人旅でフランスへ出発したのでした。時代錯誤も甚だしく、飛行機に乗る前には韓国女性はまだチマチョゴリを日常的に着ているものだと思い込んでいて、乗ってすぐに自分自身の愚かさにあきれ果ててしまったのでした。なにしろ大学の外国語学部に入る機会を与えられていなかったら、極端な言い方をすれば外国といえば米国だけしかないぐらいに思っていたのですから。今度はいつ訪れることができるかわからない、生まれて初めてのヨーロッパ、そしてフランス、たった３日しかない！寝ている余裕などないと思いながら。

フランス学科へ入って同時に始めたNHKフランス語講座のなかで、パリ以外の都市で私の心をわくわくさせてくれた初めての場所、それがDijonでした。行きたい！これが私の“追っかけ旅”のルーツかもしれません。ここでは、講座で教わった触ると幸せになるというChouette en Pierre（フクロウ）を探しに行かねばなりませんでした。でもいま思い返してみると、それはなんでもない場所にあり、長年無数の人の手に触られて磨り減っていたと記憶しています。あいにくの日曜日でマスタードは買う事ができませんでした。

３日間などあっという間でした。パリの地下鉄のcarnetを全部使い果たすほど乗りまくり、途中検札官に取り囲まれたりという珍事も発生したり、Saint-Germain-en-Layeまで行ってルイ14世が生まれた館であり、デュマが「モンテクリスト伯」や「三銃士」を執筆したというPavillon Henri IVを訪れました。夜は、パリ市内のMOGADOR劇場で＜CABARET＞を見たのでした。ここで一番驚いたのは、舞台と客席が一体化していて、キャバレーの居酒屋の場面で一番前の列に座っている人たちはまさしくお客でありながら、舞台の中のお客でもあり、舞台の女優さんからお酒をついでもらっていたのでした。その時ほど最前列の席に執着心を持ったことはありませんでした。

さて、その後に訪れたあまりなじみのないフランスの町を紹介しましょう。1997年10月、南仏のアヴィニョンとアルルのあいだにある小さな町タラスコンを訪れました。当時私は、Alphonse Daudetに傾倒していました。彼の楽しくて愉快な作品＜Tartarin de Tarascon＞の舞台です。そこへ行きたい！と思い、またもや“追っかけ旅”を実行したのでした。駅にはスーツケースを預けるようなコインロッカーもなく、素朴な人柄の駅員さんが快く無料で預かってくれました。タルタランに扮装した絵葉書が街角のお店に並べられている様子から、陽気なお祭りが想像されました。そしてドーデもきっとこの町へ来たのだろうと思いを馳せながら散策をしました。

1998年10月、“追っかけ旅”第三弾！ＮＨＫフランス語講座の舞台はコルマール。ウンターデンリンデン美術館が私の心の中で増幅に増幅を重ね、またもや行きたい！という叫びと同時に決行していたのでした。イゼンハイム祭壇画の傑作に見入ること数分…？！その場に居合わせたフランス人男性から否応を言わせないような「実にすばらしいよね！」という最高のほめ言葉の相槌をせまられ、思わずOui, ouiの連発で反応しました。が、実のところ、今までこんなにグロテスクな生々しさに出会ったことのなかった私はただただびっくりしていただけだったのでした。

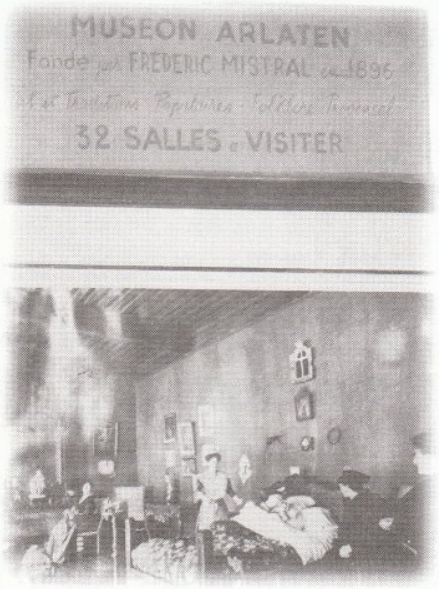
ストラスブールに宿泊していた私は、パリのときのように夜は一度くらい劇場か、あるいは映画を見に行きたいと思っていました。たまたまたどり着いた映画館で2～3本やっていたうち選んだ1本が“La vie est belle”、日本名“ライフイズビューティフル”でした。その後このイタリー映画がアメリカのアカデミー賞作品賞ノミネート、主演男優賞、外国語映画賞をとる作品になるなんてことはその時には知る由もなかったのでした。ただ意味がわからずともとてもいい映画だとは十分過ぎるほど感じ、その余韻に浸ってボーと歩いていたら、電気技師だというフランス人にナンパされるというまたしても珍事に遭遇してしまったのでした。ここで学んだ教訓！道は決してボーとして歩くな！

“追っかけ旅”はまだまだ続きます。

1999年6月、NHKのBSで夢中になって見てしまったジェラール・ドゥパルデュー主演「モンテクリスト伯」、この話に出てくる重要な場所が離れ島の牢獄Château d'Ifです。マルセイユから船で15分ほどとのこと。絶対行かねば！と来てみたところ、青い海、それに反射してなお白くみえるお城がとてもきれいで、船酔いも忘れさせてくれましたし、従来持っていた牢獄のイメージがいっぺんに払拭されてしまいました。

そしてもうひとつ“追っかけ旅”をしました。といえばもちろん、NHKフランス語講座の話題に出ていたということが想像できてしまいますよね。それは再び南仏でアルル。当時まだドーデに傾倒していた私はドーデと交流があったノーベル賞作家Frédéric Mistralが建てたというアルラタン博物館へ行ってみたい！と思っていました。期待にたがわず南仏の民族衣装とその生活の様子がわかる、派手さはないが本当の南仏のよさを醸し出している博物館だなという印象でした（写真）。

アルルからマルセイユへの宿への帰り道、何かいつもと違うのではないかということが肌で感じられました。マルセイユ駅に到着して見たものは、銃を持ったたくさんの警察官たちでした。なぜこんなに突然マルセイユに警官がふえたのか？その理由は夜中のテレビと翌日の新聞で知ったのでした。マルセイユ生誕2600年祭だったのです。一晩中花火が打ち上げられたりそれはそれは騒がしいものでした。しかしアルル観光に疲れたのと、一人ではマルセイユの夜の街はさすがに怖く、部屋から出ることができませんでした。次回の2700年祭には是非、参加したいと考えています（？）。



アルタラン博物館のガラス扉
上部が表札、下部に中の展示が見える

次の日、足の踏み場もないほどのごみの山をかき分けるようにしてマルセイユ駅まで歩き、そこからSNCFで向かったのがなじみの少ない町、マノスクです。ここは、私のお気に入りの映画で、ジュリエット・ビノシュが演じた日本名“プロヴァンスの恋”、<Le hussard sur le toit>（屋根の上の軽騎兵）の原作者、Jean Gionoが亡くなるまで住んでいたという町です。この町はSNCFの駅からかなり離れており、駅から往復にタクシーを使ったのに、この日はあいにくの休館で外から眺めるだけに終わってしまいとても残念でした。またいつか行けることを夢みて……

今回、この回想文を書く機会を与えていただき本当に感謝しております。このところすっかり忘れていたフランスに対する熱い気持ちを再び感慨深く思い起こすきっかけとなりました。また“追っかけ旅”を始めてみようかなっと！

果てることのない私の“追っかけ旅”

名作映画やマルセイユ生誕2600年祭などと偶然の出会いも…

太田　理恵子

大学の外国語学部フランス学科でフランス語を習い始めて１年経とうとした1995年３月、私はいてもたってもいられず、家族の心配などそっちのけで生まれて初めてのヨーロッパへ、それも大韓航空往復チケットとホテルしかついていないたった３泊５日の一人旅でフランスへ出発したのでした。時代錯誤も甚だしく、飛行機に乗る前には韓国女性はまだチマチョゴリを日常的に着ているものだと思い込んでいて、乗ってすぐに自分自身の愚かさにあきれ果ててしまったのでした。なにしろ大学の外国語学部に入る機会を与えられていなかったら、極端な言い方をすれば外国といえば米国だけしかないぐらいに思っていたのですから。今度はいつ訪れることができるかわからない、生まれて初めてのヨーロッパ、そしてフランス、たった３日しかない！寝ている余裕などないと思いながら。

フランス学科へ入って同時に始めたNHKフランス語講座のなかで、パリ以外の都市で私の心をわくわくさせてくれた初めての場所、それがDijonでした。行きたい！これが私の“追っかけ旅”のルーツかもしれません。ここでは、講座で教わった触ると幸せになるというChouette en Pierre（フクロウ）を探しに行かねばなりませんでした。でもいま思い返してみると、それはなんでもない場所にあり、長年無数の人の手に触られて磨り減っていたと記憶しています。あいにくの日曜日でマスタードは買う事ができませんでした。

３日間などあっという間でした。パリの地下鉄のcarnetを全部使い果たすほど乗りまくり、途中検札官に取り囲まれたりという珍事も発生したり、Saint-Germain-en-Layeまで行ってルイ14世が生まれた館であり、デュマが「モンテクリスト伯」や「三銃士」を執筆したというPavillon Henri IVを訪れました。夜は、パリ市内のMOGADOR劇場で＜CABARET＞を見たのでした。ここで一番驚いたのは、舞台と客席が一体化していて、キャバレーの居酒屋の場面で一番前の列に座っている人たちはまさしくお客でありながら、舞台の中のお客でもあり、舞台の女優さんからお酒をついでもらっていたのでした。その時ほど最前列の席に執着心を持ったことはありませんでした。

さて、その後に訪れたあまりなじみのないフランスの町を紹介しましょう。1997年10月、南仏のアヴィニョンとアルルのあいだにある小さな町タラスコンを訪れました。当時私は、Alphonse Daudetに傾倒していました。彼の楽しくて愉快な作品＜Tartarin de Tarascon＞の舞台です。そこへ行きたい！と思い、またもや“追っかけ旅”を実行したのでした。駅にはスーツケースを預けるようなコインロッカーもなく、素朴な人柄の駅員さんが快く無料で預かってくれました。タルタランに扮装した絵葉書が街角のお店に並べられている様子から、陽気なお祭りが想像されました。そしてドーデもきっとこの町へ来たのだろうと思いを馳せながら散策をしました。

1998年10月、“追っかけ旅”第三弾！ＮＨＫフランス語講座の舞台はコルマール。ウンターデンリンデン美術館が私の心の中で増幅に増幅を重ね、またもや行きたい！という叫びと同時に決行していたのでした。イゼンハイム祭壇画の傑作に見入ること数分…？！その場に居合わせたフランス人男性から否応を言わせないような「実にすばらしいよね！」という最高のほめ言葉の相槌をせまられ、思わずOui, ouiの連発で反応しました。が、実のところ、今までこんなにグロテスクな生々しさに出会ったことのなかった私はただただびっくりしていただけだったのでした。